

『後撰集新抄』翻刻（六）

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (VI)_____

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67, 68, 70 and 71 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III, IV, V and VI. For this issue I have transcribed volume VII.

後撰集新抄秋下 七 (外題)

後撰和歌集卷第七新抄

秋歌下

題しらす

よみ人しらす

三三

藤ばかりまきる人なみや立ながらしぐれの雨にぬらしそめつる

○ 蘭ランの、雨にぬれて野に咲てあるを見て、かの袴ハカマは、着る人の無さに、かく立たるまゝにて、しぐれの雨に令濡オシホ初めつる事にやといふなり。立タチに裁ツ、初ハツに染シをかけたなり。さて袴といふ名によりて、真の袴の如く

いへる事、古今コノイミ上ウラ秋「ぬししらすぬ香こそにはへれ秋の野にたがぬぎかけしふぢはかまぞも、などに同じ。藤袴は花葉ハナハ茎スエともに、女郎花に似て、花は浅紫なり。香はさしもなつかしとはあらねど、いたく深き物なり。

縣居ノボリ大人などの説も同じ。和名抄に、蘭の字をあてられたるにさるによりて、後世に燕尾草といふ物と思ふは非なり。打聽ウチナガの細注に、万葉、新撰万葉等には、藤袴と書て其字を出さず。和名抄に、蘭の字をよぢはかまにあてたるをよるしき。然れども、いと

は字をあらざとよむ。さるは御題のいにしへ、蘭は食菜のあらゝぎなりしを、和名抄より、蘭はふぢはかま、蘭草はあらゝぎとよめり。新撰字鏡のみ、彼カの字を唐の代に蘭といひしは、蘭袴の事なるを、彼々の世に、蘭の辺国より出せし香草をもて、蘭と呼はせしかば、名同じくて、物異モノイなれり。此蘭袴と云蘭は、花葉共に、枯死して後雖よく薫れる物にて、實にすぐれたる香草なり。字鏡今の本には、藤を蕉と誤れり。口を書ばしくする物といへりと見えたり。蘭袴は、野にも、人の家近き處などにも生て、女郎花と同時に花さく物なり。燕尾草は、深山幽谷などに生る物なり。これを以

ても、蘭袴は、燕尾草にあ

らぬ事をわかまふべし。

三五

秋風にあひとしあへば花すゝきいづれともなくほにぞいでけるぬ異

○あひとしあへば、あひとあへばといふへ、しの言を加へて、意をつよくいひたるにて、古今の序に、いごとしいけるもの、いづれか歌をよまきりける、又窓一に、「種しあれば岩にも松は(ウツ)秋風に遇ふ程の薄は、といふに近くて、即あはぬと云もなけおひにけり松をしひは差はざらぬやも、とあるなどの類なり。秋風に遇ふ程の薄は、といふに近くて、即あはぬと云もなければ、といふ意になれり。いづれともなく云々は、長きも短きも、此方なるも彼方なるも、なべて穂に出たる事よといふなり。かくて花すすきは、万葉にはだ薄と云のみにて、只一首波奈須々伎と見えたり。此集古今に、皆花薄とよめるは、詞のうるはしきにつきてなるべし。是が穂を、花の類として、尾花ともいへば、花薄とも云事と思ひなせし物なりと、打聴に見えたり。

くわんへいの御時、后宮の歌合に

在原棟梁

衣なき身は、善乃

三五

花薄そよともすれば秋風のふくかとぞきくひとりぬる夜は

○一人寝る夜は、ことに物さびしければ、薄の聊にうちそよめくにも(二オ)、すは秋風のふくかと聞て、さびしさをそふる事よとなるべし。

題しらず

よみ人しらず

三五

花すゝきほにいでやすき草なればみにならんとは頼まれなくに

○薄は実ならぬ物なり。うはべの花々しき人は、まことすくなき事をいはんとての歌なりと、抄に見えたるが如くなるべし。されど恋の意にてはなく、ただ大かたの世のありさまをおもひよせていへるなるべし。

三五

秋風にさそはれわたるかりがねは雲のほるかに今日ぞきこゆる

○かねて、雁は秋風に誘はれてわたるといふ事なるが、もはや其時節が来て、今日ぞ雲の遙に鳴声がするよと云意なり。此歌にては、かりがねを、雁之音の意に云へりと聞ゆ。かりがねと云を、雁の名にしていへるとは、本末の違ひあり。(二ウ) 万葉十に、「天雲のよそにかりがね聞しより云々といふを、雁鳴と書き、又同巻にも、雁之喧、雁音、首家万葉に、雁之聲者、下に、「行かへりこ、もかしも雁なれやくる秋」とにかりくと鳴く、と云歌の所をも見合すべし。

こしのかたに、思ふ人侍ける時に

○こしのかたとは、越前越後の国の方をいふなり。

貫之

三五

秋の夜にかりかも鳴てぞわたるなり我思ふ人のことつてやせし

○抄には、かりかもなきては、雁やらん鳴渡るとなり。是も蘇武が古事より、彼越なる人のなつかしきが、言伝はなきかとの心なりとあり。又、かりかもは、かりがねの誤なるべしと、加藤磯足いへりき。足磯

は、尾張国起(オコシ)の人に、寔麻呂云、かりかもは、即雁の事なるべし。さ(三オ)るは、をしかもあぢかもなども、すべて其類の鳥を、かもといふならむと思ふといへり。師云、此説もさる事なれども、こは一説といふべし。此歌にては、かりがねの誤ならんとの説、よろしくおほゆといはれたり。また小林茂岳は、かりかもは、雁説なるべし。句の結のかも言は、此集の頃はかなといへど、かゝる所は、かなとはいはれざる故なり。さてかもとかなとは、意聊異なり。一首の意は、此秋の夜の空に、鳴声のするは、我思ふ人の住んで居る、越路より来る雁カヨヤマア。さすれば、かの思ふ人が、定て言つてを為たでかなアラウ、と云

なるべしといへり。此説は、抄の説に近けれど、猶安しきなり。改番は、伊勢ノ國久居の、殿人なり。

題しらず

三五

秋風に霧とびわけてくるかりの千世にかはらぬ六帖を聞ゆなり(三ツ)

○千世にかはらぬは、昔より今の世まで、いつとも変らぬと云意なり。こは女御入内か、又は、賀などをりの、屏風の歌にてもあらんか。又たと何となくよめるにてもあらんか。

よみ人しらず

三六

物思ふと月日のゆくもしらざりつ雁こそ鳴て秋をつげつれと一本

○物思ふとは、物思ふとての意なり。とゝのみにて、とての意になる事、万葉には多くあり。中にも卷十に、「物思ふと隠居カクコヒツリヤ而ユけふ見ればかすがの山は色つきにけり、とあるなどは、歌の意もやゝ似たり。古今上「くるとあく」と目がれぬ物をうめの花ユヅタなども、暮るゝとて明るとての意なり。末句は、異本に、秋とゝある方まさるべし。

やまとにまかりけるついでに(四末)

三五

かりがねの鳴つるなべにから衣たつたの山はもみぢしにけり

○此歌は、万葉十に、詠三黄葉とて、四十一首出たる中の歌にて、二ノ句、来鳴しオノベ共に、来鳴しなべには、来鳴しにつれてと云意なる末句、黄始オウシ有とあり。人丸集といふ物には、末句いろづきにけりとあり。猶万オホヒラノイナダリ共オホヒラノイナダリに書けるにても心得べし。此万葉に

葉の此歌の次には、「かりがねのこゑきくなべにあすよりはかすがの山は黄始キチダマてん、又同「かりがねを聞
つるなべにたかまとの野の上の草ぞ色づきにける、などいふもあり。趣意も大かた似たり。から衣は、た
つ田といはん料の枕詞なり。

題しらず

三〇

秋風にさそはれわたるかりがねは物思ふ人の宿をよきかなん一本

○物思ひあるをりにきけば、いとと思ひのそふなれば、我宿をば避よよ(四)となり。古今夏、「夏山になく
郭公心あらは物思ふ我に声なきかせそ、意もやゝ似たり。よくは、万葉十一歌、曲道五と書たり。直直に行べき
道を、外へまはるやうの意なればなり。直道(タダチ)の 反対(ウラ)なり。今俗に、ヨケルといふに同じ。古今下春「春風は花の
あたりはよきてふけ心づからやうつろふと見ん。又「此一もとはよきよといはまし。帯木ノ巻木柱女に、
此女の家はたよきぬ道なりければ云々など、猶かたくに見えたり。よかよきよくよげと、四種にもはたしき、又よくよげと
よくれと、二段にもはたらく調なる事は、問のやちまた
に委く見えたり、ひらさて又此よくよきなどの、かきくけの言を、濁るはひがことにて、必清むべき證は、菅家
万葉に、「秋の月くさむらよきすてらせばや云々といふを、斧柄ツノとかりてかゝせ給ひ、又曾丹集に、「春山
にきこる木こりの腰にさすよきつゝきれや花のあたりはといふを、契沖五法師の餘材抄に引かれたるに
て明らけし。

三一

たれきけとなくかりがねぞ我宿の花が末をすぎがてするにして一本

○抄に、宿の尾花の見渡しに、雁がねの聞ゆるに感じてよ詠なりとある、然るべし。四ノ句を花が末をは、

抄本にはすゑと仮字にて書り。然れども、こはうれとよまんも然るべきか。此歌はやゝ古き調に聞ゆればなり。たれきけと云々といふに、我に聞けとの心ならんといふ、余情をふくみたるなり。それは、三ノ句に、我宿のといひ、末句に、過がてにしてとあるにて、しか聞ゆるなり。過がては、過かたげなり。古今下「我やとにさける藤なみ立かへり過がてにのみ人の見るらん、など皆同じ。」

三二

ゆきかへりここもかしこも旅なれやくる秋ごとにかり／＼となく(五)

○雁は、何所どことても旅なればにや、毎秋来るとに、空を行帰りつゝ、かりぞ／＼となく事よとなり。句初

は、末句にかけて心得べし。朝夕日夜に往返る事なり。春来て秋帰る事にはあらず。かり／＼とは、仮の世仮の宿などいふかりにて、常住な仮初の意にいへるなり。

次二首にいへるも同じ。又万葉十に、「ぬばたまの夜わたるかりはおぼ／＼しくよくよをへてかおのが名をのるともありて、かりといふ名も、もとはかれがなく声によりておほせたるよし、略解にも見えたるが如し。すべて草木鳥獸などの名、大かたは、其形容其鳴聲などによりて、おほせたる物とは思はるれど、いまだ密くは得考へず。

三三

秋ごとに来れどかへればたのまぬを声にたてつゝかりとのみなく

○秋は来ても、とよまらずして、春は必かへる雁なれば、来しとて誰も実には頼まぬ物を、我は仮かりに来た／＼と、表にあらはして、鳴ありく事たまよとなり。

三四

ひたすらにわが思はなくにおのれさへかり／＼とのみ鳴わたるらむ

○一首の意は、上の歌に同じ。抄には、仮の世界ながら、我は一向にもえ思ひとらで、実有の相に着し居

るに、己さへ仮々と鳴わたるよとなりとあり。かくては、菅家万葉に、「常ならぬ身をあきぬれば白雲に飛鳥さへぞかりと音をなく、とあるに似たるおもふきなれど、猶此説はいかゞなり。二ノ句のなくにとありて、らん」とぢめたる勢ひ、例の二ノ句のにもじに力ありて、いでと云事を加へて聞く格なり。又、おのれさへとあるにもかなはず。六帖には、「ひたすらに我がきかなくに雲わけてかりぞ」と告わたるらんとあり。

人の、かりは来にけると申を聞て（六ウ）

○此詞書は、傍なる人などの、雁の声を聞て、あゝはれ雁は来にけると、云たるほどの詞の勢ひにて、時節に感じていへる意と聞ゆるなり。雁はと云て、けるとあるてにをは、いはゆる変格なればなり。と受るには、おほよそ、上は切る、格の辭より受るが定まりなる事、玉緒五の巻に委く見え、変格の事は、二の巻に見えたり。ひらき見て心得べし。

みつね

三五

としごとて来るかりは 六帖に雲路まどはぬかりがねは心づからや秋をしるらん

○雲霧深き北国の空は、わけも迷ふべき（マツ）をまどはずして来るは、自然と、此南方へ来るべき時を知ての故にやあらん。かくも年毎に違はず来れるは、といふ意なるべし。心づからは、心からといふに近く、かれが心としてといふ意なり。つは助辭といはんが如し。手づから身づからおのづからなどの間、みな（七オ）おなじ。古今春下「春風は花のあたりはよきてふけ心づからやうつろふと見ん、など考へ合すべし。

やまどにまかりける時、これかれともにて

○ともにては、諸共（モトモト）にてと云事と聞ゆ。陪従（トウジ）の意にてはあらざるべし。

三六

天川かりぞとわたるさほ山もみぢはのごず万代集あはうそべも色づるぎにけり六帖

○雁の雲路をわたるを、やがて其所の川の名と、天上なると、同名なるゆゑに思ひよせて、あやとせるなるべし。とわたるも、川の縁語なり。川門(カハト)水門(ミ)天川は大和古野にも、河内交野にもあり。此歌によめ

るは、詞書によるに、大和の方なるべし。夫木抄四に、俊成卿、「吉野山花やちるらん天の川(七七)雲のつゝみをあらふ白波、師光朝臣、「花の色をひとづこめて天川くものみなとやみよ野の山」とあるなどは大和ノ國にて、

被後撰夏に、為家卿、「天川遠きわたりにけりかたのよみの、五月雨のころ、新拾遺春に、津守國助、「宿かさね天の川原やうからまし交野に花の藤なかりせば、とあるなどは河内ノ國なり。」佐保山は、大和ノ添上なり。

兼輔朝臣、左近少将に侍ける時、むさしの御馬むかへにまかりたつ日、にはかに、さはる事ありて、かはりに、おなじつかさの少将にて、むかへにまかりて、あふ坂より隨身を返して、いひおくりはべりける

藤原忠房朝臣

○近衛の中将少将ともに、左右四人つゝのよし、職原抄などに見えたり。兼輔ノ朝臣は、延喜十三年、左近少将藏人、十七年、藏人ノ頭。忠房ノ朝臣は、延喜十一年、左近少将、十八年、四位上少将と、(八)公卿補任に見えたり。御馬迎とは、毎年八月の十五日、但古へは、十五日なりしかども、朱雀ノ院の御圖忌にあたりて後は、十六日になりたるよしなり。十七日、二十日、二十三日、二十八日に、信濃、甲斐、武蔵、上野の國々より、牧馬ヌウマを奉るを、近衛司の、逢坂まで迎へらるゝ事なり。二十日には、武蔵ノ國、小野ノ御馬四十匹、秩父ノ御馬二十疋、立野ノ御馬十五疋など見えたり。延喜式、江次第、年中行事ノ注等、諸書に委し。兼輔ノ卿、此駒迎の使にあたりて、出立んとせらるゝ時に、俄に故障サハレト出来たれば、同官の忠房ノ朝臣代りて、逢坂に着たる後、召具せられたる隨身オホカシ

三七

秋霧のたち野の駒をひくときは心にのりて君ぞ人こひしき九

を京に帰して、此歌を、兼輔ノ卿の許におくられたるなり。隨身は、ス井ジシとよむなり花鳥餘情巻に、職によりて隨身を給はるはかぎり有て、出仕のたびに、よの常めしぐするなり。其ほか時にしたがひて、一人づゝハこめしわたすを、かりの隨身といふなり。假令、納言の大將以下は、左は左、右は右の、番長一人、近衛五人、すべて六人の隨身をゆるされて、召具するなり。そのうへに、拝賀などの時は、将監将曹、府生を、又一人づゝ具するを、一員とも、かりの隨身ともいふなり。いづれも皆、地下の輩なりと見えたり。但隨身をかへす事は、定りたる例にはあらざるべく思はる。相取に二日と

ととまり居るべき事然れども、此歌をおくらん料のみに、かへさるべき事にもあらねば、何かしか返へさるべきよし有て、かへさるゝ序に、歌をばものせられたるなるべし。猶よく／＼考ふべし。

○秋霧のは、其時節の物を以て、たち野といはん料の、枕詞とせられたるなり。

大帖に「あふ坂にひくらん駒を秋霧の立野かどこそたまほしけれ」と

も立野は、武蔵ノ国の牧の名なる事、詞書の注に記せり。こまは、たゞ馬の事なり。必ス子馬ツツならでも、こまといふは常なり。漢書に、駒の字を遣へるも同じきなり心にのりては、兼輔ノ朝臣の事の、吾が心の上にあるをいふなり。万

葉二に、「東人の荷前の箱の荷の緒にも妹が心に乗にけるかも、と有て、縣居ノ大人云、巻十四東歌に、「白雲の絶にしいもをあせセと許己コ呂尔能里リこコばかなしけ、といふを以て見れば、妹が事の、常に吾心のうへに在るをいふなり云々。荷前は、何れの国もあれど、東ノ国より、年ごとにはじめに奉る調物を、

荷前といふ。遠き国より奉るなれば、はこに納て、紐して馬にのせツケ上る故に、荷の緒とも、乗といふ言も有リといはれ九たり。のりては、馬の縁なる事、下別離に「おくれずぞ心にのりてこがるべき波にも

とめよ舟はなくとも、とある、舟の縁にいへるに同じ。但し、万葉十四の東歌にて思へば、馬舟などの縁なしにもいへりと見えたり。

三六

だいしらず

在原元方

石上ふる野の草も秋はなほ色ことにこそあらたまりけれ

○古きといふ野の草も秋はやはり色のかはりて、新アツクになりたるよとなり。色ことに改アツクまるとは、即露霜に、色のうつろひ変る事なり。それを古野といふに對へて、新まるとはいはれたるなり。

三六

よみ人不知

秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なき露はそめじと思ふに

○秋の野が、錦の如くにも見ゆる事かな。おく露は白露なれば、えかやアツクうに染めはせじと思ふに、いかでかくは染つらんとなり。六帖には、末句、おかじとぞ思ふとあり。

三七〇

秋の野にいかなる露のおきつめばおけはかはちオキツメの草葉にの色かはらむ

○おきつめば、置積オキツメればなり。四ノ句、本集の方にては、千々のといふ事、草葉へかゝりて、いづれの草もなべて色のかはるは、いかなる露のおきつむ故ぞといふ意。六帖の方なれば、千々にといふ事、色かはるといふへかゝりて、紅にも黄にも、濃くも薄くも、おのがさまくに色の変るをあやしむ意になるなり。此歌にては、六帖の方まさりざまに聞ゆ。

三七二

いづれをかわきてしのばん秋の野にうつろはんとて色かはる草

○此歌の意、抄には、秋野の草花の、散らんとて色かはる草々の、なべてアツクあはれなれば、いづれをと

三三

声たてゝなきぞしぬべき秋霧山六帖に友まどはせる鹿にはあらねど

紀ともものり

りわきて恋しのばんとなり、とあれども、今思ふに、然にはあらじ。うつろふとは、色づきてやゝ枯んとするをいへりと聞ゆ。うつろふといふも、色かはるといふも、同じ事なれども、うつろふをば、あだなる方にいひ、色かはるをば、うつろふといふも、同じ事なれども、一首の意は、秋の野の草に、色の変るとかはらざると二やうあるを、色のかはる方は、うつろふとて色のかはるなれば、今見る所はめでたけれども、あだなり。又、変らざる方は、あだにはあらねども、見たる所めでたからず。然れば、今いづれをか、とりわきて慕シばん、と云意なるべし。歌のおもてには、「いづれをか云々とあるのみにて、色の変らざる方は見えぬやうなれども、猶下ノ句、「うつろはん」とて云々といへるは、必々色のかはらざる草に対へていへ(十一)なる語勢と聞ゆるなり。

○抄には、秋の霧に友まどはして鳴鹿の音に、秋の感情を催されて、音もなかまほしき心なるべし、とあれども、今思ふに、秋の歌にはあらで、恋雑などの歌なるべし。初二ノ句は、声をたてゝ鳴ぬべきこゝちのせらる、といふ意なり。抄に、なかまほしき心と 秋の山べにて、霧のまぎれに友を失ひて、尋ぬとて、声をあげて鳴く鹿にてはなけれども、我も彼鹿の如くに、声をあげてなきぬべきこゝちのせらるゝよ、といへるなれば、下ノ句も、たゞ声たてゝ云々といはん料のみにあらで、思ふ人の在所ところを失ひたるなどやうの事にとへたる意も十一とありげに聞ゆれば、恋雑などにてあるべしとはいふなり。すべて、某(ナニ)ならぬ、又某(ナニ)物其事のさまに、いとよく似たるをいふ事なり。今ノ世の 友まどはせるは、迷(マド)はしけ 友を見失ひて尋る意なり。榎本ノ巻俗にも、某(ナニ)テハ無イガ云々といふ事常多クあり。

に、「朝霧に友迷はせる鹿の音を大かたにやはあはれともきく、又拾遺^キ「夕されば佐保の川原の川風に友まどはせる千鳥なくなり、など猶多かり。

よみ人不知

三三 三三 たれきけとこゑ高きごにさをしかの長々し夜をひとりなくらん

○初句たれきけとは、我にきけとの心にて鳴くならん、と云意をふくめり。上に、「離きけとなくかりがねぞ我僧の風花の末を過がてにして、とある歌をも引合せ
て心傳高砂は、號名なる事、善末句は「十二ま、鹿の、妻を恋ふと
べし。二ノ句は、声高くといふを、高砂に云かけたり。中巻にいへるが如し。

て鳴くなれば、ひとりなくらんとはいへるなり。さて、我が一人寝にてきく意をふくめたるなるべし。一首の意は、我が一人寝にて、夜の長きをわぶる頃しも、山辺の鹿の、妻恋る声高く、夜もすがら鳴くは、誰にきけとての事ならん、我に聞て、さびしさをそへよとの心にや、といふなり。

三四 三四 打はへてかげとぞたのむ峯の松色どる秋の風にうつるな

○打はへては、末長くいつまでもといはんが如し。末長く我が頼む蔭カクと思ふ松なれば、いつまでも、散り失する事なくもがなとなり。色どるは、樹木の紅葉する事なり。木葉のみみづるころは、又木葉の散るものなれば、其秋風などに、散失する事なかれ、といふなりと、師翁いはれたり。二ノ句、かげとぞたのむは、夏の納涼などの蔭にて、万葉「二三七に、「かたをかの此むかつをに椎まかばことしの夏のかげになみんなも、とあるなどの蔭の事ならんか。又は、人の許などに遣りたる歌にて、ふくめたる意もあるにか、今はしりがたし。此歌、友則集に見えたれども、詞書などもなければ、ことに考ふべきよしもなし。

されどまづは、夏の蔭の事なるべく思はるゝなり。

三五

はつしぐれふれば山べぞおもほゆるいづれのかたかまづもみづらん

○秋のしぐれのふれば、山方の思ひやらるゝ事よ。さるは、何かたが先ッさきに紅葉すらんと、ゝなり。家持集といふ物に、「秋風のふくにつけてぞおもほゆるさほの山べは今やもみづる、とあるも大かた似たり。もみづは、紅出を略きいふなり。

とも有、紅葉へ十三オと書たる所、只一所なるよしなども、考に見えたり。

詞のもとには、万葉考に委しく見えたり。かくてもみぢばを、紅葉と書く事、から國、唐の王維詩愈などが特に見ゆれば、はやくよりかしこには書けん。然るを、万葉には、多く紅葉と書、又赤葉

三七

いもが紐とくとむすぶと立田山今ぞもみぢのにしきおりける

○初二ノ句は、たつといはん料の序のみなり。趣意は、秋もやゝ深くなりぬれば、立田山の紅葉の、もはや錦と見ゆばかりになりたるよ、といふにて、ほかにかくれたる事はなし。さて此歌は、万葉巻十に出て、二ノ句、解登結而、下ノ句、今許首黄葉始而有家禮、と有て、是は、紐を解と、やがて結びて、立といひかけたるなりと、翁藤原はいはれつれど、後撰集に、「いもがひもくとくとむすぶと立田山とてのせたらば、ふるくはむすぶとゝ有しか。しからば、解とても結ぶとてもといふ意にて、明らかなり。恐らくは、而は等の誤ならん。一二の句は、立といはん為の序のみと、略解に見えたり。かくて、為家卿抄云、或人のいはく、いもが十三オひもは、はかまの腰なり。女の袴のこしは、ゆふとてもたち、解くとてもたてば、立田とつゝけたるかといへり、と見えたり。これにて明らかなり。

猶此、殊が紐云々云間の事、藤原臣委さ論あれども、事長ければ略けり。

三七

かり鳴てさむきあしたの露ならし立田の山をもみだす物は

○此歌も、万葉十に、「かりがねのさむきあさけの露ならしかすがの山を令黄オウゴウものは、と有て、もみちといふも、紅は揉出モミデして染る物なれば、もみ出しの約言なり。されば、もみだすものはと訓べしと、翁ウツはいはれたれど、猶元曆本の訓によるべしと、略解にはあれども、此集にも、もみだすとあれば、これも古き訓なるべし。猶万葉八に、「吾やどの芽子メコの下葉は秋風もいまだふかねばかくぞ毛美照モミテ、といふもあり。

三六

見ること秋にもなるかな立田姫もみちそむとや山もきるらむなるか一本あるかな

○立田の山を見れば、霧のたちてあるは、立田姫の、紅葉を染るとて、さやうに、山はきりのたちたるにや。さてもく、見ると見る物ごととに、秋のけしきにてもある事かな、となるべし。抄に、立田山の日々に秋のけしきを見するさまなり。山もきるとは、霧の立なり。天霧アメカスミと云詞の類なり。露にも霧にも紅葉をそむれば、かくよめり、とあるぞよろしき。山はきるらんは、山をはくもりてさえぎり隔つらん、といはんが如し。きるといふは、物をさえぎりて見せぬ心なれば、霧をきりとはいへりと、契沖法師いはれ、霧はもとくもる事なり。秋霧などいふは、歌詞の巧にて、古言にあらすと、縣居ノ大人いはれて、猶万葉二に、「秋の田の穂上ホノノヘル霧相朝霞キリノアサカスミ云々とあるを、きらふは、くもりをいひて用なり。霞は、其くもりの体なり、などいはれたるをも、引合せておもふ千四ツべし。万葉八に、「打霧之雪ウチカスミはふりつゝ云々、」棚霧合雪タナカスミもふらぬか云々、「天霧之雪アメカスミもふらぬか云々、とあるなども、みな霧合霧之、など書たるをも思ひ合すべし。また、涙にくれて、目のくもりたる事を、目もきるといへる事あり。帚木巻、

源氏ノ君の御文を、小君が持て来たるを見
て、空蟬ノ君の、我が身のほどを思ひて、
涙にくれて、歌、御文「みし夢をあふよありやとなげく間に目さへあはでぞころもへにける、ぬる夜なければな

ど、目も及ばぬ御かきさまも、目もきりて、心えぬすくせうちそへりける身を、思ひつづけてふし給へり。又葵ノ巻 葵ノ上ノ君のむなくなり給へる後に、大宮ノ御詞 に、月ごろは、いとど涙にきりふたがり云々、椎本ノ巻歌に、「涙のみきりふ

たがれる山里はまがきの鹿ぞもろごゑになく、などなり。 舞といふは、体言にして、名としたるなれば、かへりて未なり、きりてなどいふは、用言にて本なり。さて近世にては、舞といへば、

秋の物とのみ心傳たる人もあめれど、もとは彼くもりへだつる意を以て、春にも十五オ冬にもいへる事、万葉の歌を以てわきまふべし。 二ノ句は、「秋にもなるか」とある本もありたるよし、抄に見

え、六帖、友則集などには、あるかなとあり。よりて思ふに、本集に、なるかなとあるは、必写誤れるものなるべし。かくさまの文字あまりの歌、此集などのころには、をさく例なき事なればなり。 古今集此集などより、千載集の

頃まで、五文字の句を六もじに、七文字の句を八文字に、よむ事は其句の中問ふらむに、あいうおのうちの文字ある間にかぎれる事にて、「いせのあまの、か」といふは、などやうの句に限れり。委くは、鈴屋ノ大人、玉敷にわきまへおかれたれば、彼書を見、又古歌をよく考へわたしてこゝろ傳べし。

く、あるかななるかと、二やうなる中にも、あるかなの方然るべく聞ゆ。さるは、初句見ることにとあれば、あるかなとなくては、かけ合よろしからねばなり。 なるにては、上よりのかかり、変(へ)るの意と聞ゆれば、さては、初句見るまじなどあるべければなり。

さて、龍田姫は、風ノ神にて、 平群郡、龍田坐、天ノ御柱、国ノ御柱ノ神社、二座、並名神大、月次新書。龍田比古、龍田比女ノ神社二座と延喜式にも見え、あらしのたぬため、年毎の四月に、朝(十五日)延より御使立て、祭あり事も古

書にたたくに見えたり。万葉九に、「わがゆきは七日なすむ龍田坐ゆめこの花を風にちらすな、とあるも、風の神にてませばなり。立田姫としも申は、立田に大まします。婚神の意にていへるなり、男神を、立田坐と申も、同じ心はへたり、彦は姫に對ひたる神なる事、上秋ノ上にいへるが如し。

は、物染るなどの事にはあづからざれど、紅葉の名ある、立田の社にまし、 但し立田を紅葉の名所とする事も、今の京と成て、古今の、立田川紅葉みだれて流

るあり云々、なすの歌によりて立田を紅葉の名所とし、其地にまします神を、秋をつかさどる神なりといひなせるなるべし。いにしへは、飛鳥の神並山をこそ、紅葉となる所にはよめれ、立田に紅葉の事はいざりしなり。此頃の人は、たゞ歌に泥みて、神をもあやしくとりし事なりと、麒麟ノ大人いはれた。 秋をつかさどりませる如く、 此事は上秋ノ上ノ巻にいへり、 いひならはせるより、又物染る事をも司どりませるやうに、

いひなしたるなり。そは此歌などやはじめならん。 木枯の女の、衣を染織などする 龍田姫といはんにもつき

きながらず、たなばたの手にもおとるまじく云々、 事、の巧なりしをいふ所 なども見えたり。 紅葉にもあれ花にもあれ、いにしへよりの(十六オ)名

所ならでも、其世に其物のいともくあらんは、おのづから名所の如くならんは、むげにあるまじき事にもあらねど、神の御上をあらぬさまにいひなす事、むげに近き世の事にはあらねど、こはよからぬ事なり、かくさまに、調花言葉のために、調言の如くいひなしたる事とするより、然には、いかなる神に大ましますとたれ、

ぬやうになりてもゆくはしにて、いともくかしく、あぢきなまきわざなりけり、古へ
にこゝろざしあらん人は、よく心すべき事になんありける。あなかしこや。

三七

梓弓のいるさの山のは秋霧ののあたるごとにや色まさるらむ

源宗于朝臣

○初句は枕詞にて、四ノ句のあたるも、弓の縁語にいはれたるなるべし。入佐山は、但馬国と、八雲御抄などにも見えて、大かたは、但馬といへれど、或は丹波ともいへり。一首の意は明らかなり。

はらからどちのうち異、いかなる事か侍けん

よみ人しらず十六

三六

君とわれいもせの山も秋なくれば色異かはりぬる物にぞありける

○抄云、いもうと兄いもうととにそへて、同胞いっどうの中に疎略あることの恨を述しなるべしといへり。此歌、宗于集には、はらからなる人の、うらめしき事ある時、と詞書ありて、「君と我いもせの山も云々とあるを、引合せて思へば、抄の説の如くなるべし。いもせは、夫妻の中にのみは限らざる事、上上にいへるが如くなればなり。然れども又、下下に、はらからの中に、いかなる事かありけん、常ならぬさまに見え侍ければ、よみ人しらず、「むつまじきいもせの山の中にさへへだつる雲のはれずもあるかな、とあるも、もはら同じければ、同じ人の歌なるべく思はるゝを、此集にては、二所ともに、「いかなる事か侍けん、などゝあるは、いさゝかやうありげにも聞ゆるなり。此事は、下下にも、別記十七にも論へり。猶引合せて見るべし。妹背山は、紀伊国なり。万葉四に、「おくれゐて恋つゝあらずは紀の国のいもせの山にあらまし物

を、など猶多し。

題しらず

元方

三六

おそくとく色づく山秋六帖又友則集のみぢ葉はおくれさきだつ露やおくらん

○抄に、どる一本遍昭の、「末の露もとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらんを本歌にや、とあり。まことに露は、或は夕べにおき、又は夜半におき、或は朝早くきえ、又は昼にも残りなど、おくれさきだちて、はかなくさだめなき物なるが、此黄葉オキナギの、まだしきも色いろこきも、さま／＼あるは、かのおくれさきだつ露のおきて、染たるにやあらん、と云にて、彼僧正の歌を、本歌にとられたるならんか、又は、本歌にとりてよナセじめるにはあらで、同じ類によまれたるにてもあるべし。

立田山をこゆとて

友のり

三三

かくばかりもみづる色うつろふ六帖のこければや錦たつ田の山といふらむ

○錦をたつといふは、たゞ截きりのみをいふにはあらず。俗に云、為シ立タツる事なり。此歌なるも、かくばかり他に勝りて、紅葉の色濃コきゆゑにや、錦ニシ為シ立タツの山といふらん、といふ意なるべしと、麴麻呂いへり。

題しらず

よみ人もしらず妙

三三

から衣たつ田の山のもみぢ葉は物思ふ人のたもとなりけり

○から衣は、枕詞にて、末句も縁語なり。紅葉の色濃きは、我が如くもの思ひあるものゝ、紅涙にて染たる袂なるよな、と云なり。かくざま(十八ま)に、物思ふ人などいへる、人は、大かたに世ノ間の人をさしていへる詞にて、即我身の事をいへるなり。上に、「秋風にさそはれわたるかりがねは物おもふ人の宿をよかなん、などすべて此類の上に云てかへりて我身の上の事にあてたる詞、皆同じ心ばへなり。

もる山をこゆとて

貫之

○守山は、近江国なり。抄に、比良ノ山の麓なり。一説に野洲河の辺、森山と同所なりとあり。今思ふに、古今下秋に、此之主の、もる山のとりにてよめる、「白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり、とあるは、此所の歌と、同じ時のことにや。古今の歌は、家集には、竹生島にまうづるに、もる山といふ所にて、とあり。契沖法師云、もる山は、近江なり。世にもり山(十八)こといへり。家集に云々、もり山は、美濃路へかゝる道にて、竹生島の道にあらず。もしは、同名異所の近江にあるにや、といはれたれば、抄の、一説とある方もすてがたし。

三四

あし引の山の山ももる山もみぢせさする秋は来にけり

○抄に、山守ありてまもる山なれど、紅葉は、秋の心にまかせたる心なるべし、とあるが如し。もる山といふにつきて、山守の、守るといふ名の山もとなり。四ノ句は、もみぢせ、紅葉の名言体としていへるなり。上の、もみぢすもみぢるなど、ヤスルセ、ヤスガ、用言にいへるとは異なり、令レ為三紅葉一の意なり。

だいしらず

三六五

から錦たつたの山もいまよりはもみぢながらにときはならなん

○錦をたつといふ山にはあれども、今よりは、紅葉のまゝにて、たち散チリ九クせらさずに、常盤にてあれかしとなり。又、薨麻呂は、錦を仕立シナれば、服となりて、錦は失ウツする故にしか、錦を服に裁カといふ山も、猶錦の失する事なく、常にあれかしといふなり。今よりはといへるに心をつくべしといへり。

三六六

から衣立田の山のみぢ葉ははたものもなき錦なりけり

○機ハタキありてこそ錦は出来れ、機もなくして錦をしたつるを、あやしみてでたる意なり。はたものは、布を織る具にて、今の俗に、ハタゴといふに同じ。ハタゴは機具ハタシなり。和名抄に、機、国語ノ注云、織オリ三設フルニ経緯ツツ、以機成ツク三繪布ス也。楊氏カ漢語抄云、高機和名、多と見え、加波太と見え、万葉十七夕に、ハタキモノツツ歌に、「機ハタキ木もてゆき天川うち橋わたす君がこんため、などもある物なり。」

人々もろともに、はまづらをまかる道に、山の紅葉を、これかれよ(十九)み侍けるに

忠岑

三六七

いくきともえこそ見しられねわかね秋山の紅葉の錦よそにたてれば

○初句、聞つかぬ詞にて、心得がたかりつるを、我友、須賀直入云、直入は、伊勢國の人にて、我が學の兄弟なりしを、今はなき人となりぬ。山城大和などの詞に、衣服の着文オビの事を、一着ヒトふた着といふ事あり。此歌の初句も、此着文オビの幾着イタヤに用ひたるなるべし。猶此外の古歌などにも、心をつけて見ば、例もあるべし、といへりき。此説によりて、心をつけて見るに、げに其意なるべく思はるゝは、六帖に、「秋の山紅葉の錦いくきともしらすできりたつ空のはかな

さ。此歌、異本忠見集に出て、末句「空そはるけき」とあり。又、異本忠見集に、「いろ／＼の紅葉のにしききりたちてのこれるはしはいくきとか見ん、とあるなど、みな錦といふより、着丈の事にかけてたりと見ゆれば、此歌のいく木(二十)とも、幾着にかけたる事しるし。よそ目よそ目は、遠く離れたるをいふに遠く見れば、幾木幾木もとも見えわかずと云を、錦の縁にて、幾着にかけたるなり。此詞は、此集にはじめて見えたる事は論なし。末句たてればは、立て在ればなり。下下は、「ことしげししははたてれよひの間にいくらん露は出てはらはん、とあるたてれに同じ。

題不知

よみ人しらす抄

三六

秋風のうち吹からに山も野もなべて錦に異をおりかへすかな

○おりかえすは、翻ヒルガす心なり。錦織錦織るにそへたるべしと、抄に見えたるが如し。初二ノ句は、秋風の吹と其まゝに、といはんが如し。うちふくといへる、うちの詞勢とありて、末句おりかへすのおりにかけ合ひたり。(二十)

三六

などそさら六帖に秋かとゝはんから錦立田の山のみぢしるきを

○立田山の紅葉にて、秋ぞとは灼然イザシレものを、いかでことさらに秋なるかとは問はん、となり。此歌末句、「紅葉するよを、とある本は誤なるよし、玉緒に見えたり。今思ふに、げに誤にはあるべけれど、むげに理なきにもあらじ。時節トキの意に、よといふ事あれば、紅葉する節トキをと云意と聞ゆるなり。されど六帖にも、しるきをとあれば、此方ぞたゞしかるべき。

三九〇

あだなりと我はみなくにもみぢ葉を色のかはれる秋しなければ

○秋ごとに紅ベニにのみ染シて、他の色にそみたる事なければ、紅葉をあだなりとは我は見ずとなり。古今下に、「花のごと世のつねならば過してし昔はまたもかへり来なまし」とあるは、年毎にかはらず咲事を(二十一)、常なりといひ、こゝは、毎年色の同じきを、あだならずといふにて、似たるいひなしなり。抄には、もみぢ葉を人は散やすくあだなりといへど、我はあだなりと見ず。其故は、色は千秋も紅にかはらねばとなり、とあるは、二ノ句の、見なくにといふ詞の勢を、つよく見たるにて、これもさる事なれども、猶此歌にては、我は見ずといふ意とせん方まさるべし。其なくにと云詞、ただ葉せずと云意にいひて、終のには、てにをはのにとはいさゝか異にて、軽く添ふる事、万葉などにも見えて、古歌に例多し。さて見なくにを、見ずといふ意と見る時は、初二ノ句も、たゞ大らかに、我はあだなる物とは見ずといふのみにて、如く人はあだなりといへど、千秋も云々と云までにはあらざるべし。

貫之

三九一

玉かづらかづらき山のもみぢ葉はおもかげにのみ見えわたるかな(二十一)

わたりけれ 六帖

○初ノ句は、かけの枕詞にて、葛城といはん料とせられたるなり。そは万葉二に、「人はよし思ひやむとも玉かづらかげに見えつゝわすらえぬかも」とある歌の詞によりて、おもかげに見ゆといはんとて、玉かづらと云枕詞をおき、其枕詞を、かづらき山へいひかけられたるが、此歌の巧なり。されど、こは一首の意にあづかる事にはあらず。さて此歌より後に、玉かづらを、葛城山の枕詞にも用ふる事とはなれり。一首の意は、葛城山の紅葉のうるはしきに、深く心をそめつれば、見ざる時にも、常々おもかげにたつ事かなといふならんか。わたる、とは、月日を経行く事をいへるなれば、数日おもかげに見ゆる意なるべ

し。又思ふに、古今二卷、「こえぬまは吉野の山の桜花人づてにのみ聞わたるかな、などの如く、恋歌にて、思ふ人のあれども、逢事は二二三かたたく、たゞおもかげにのみ見えつゝ、いたづらに月日を経る事かな、といふなるべきか。伊勢物語廿一、「人はいさ思ひやすらん玉かづらおもかげにのみいと見えつゝ、とあるなども思ひあはずべくや。葛城山は、大和国なり。

三九二

秋霧のたちしかくのみかくすせばもみぢ葉はおほつのかなくて散ぬやみぬべら六帖なり

○おほつのかなくて云々は、紅葉を見まほしく思ひわたるを、かくてはつひに、見ざる間に散果るにてあるべき事かなとなり。此歌、六帖の如くなれば、恋歌なるべし。三ノ句のとあるは、此句までは序と聞え、末句もきはめて恋と聞ゆるなり。

かどみ山をこゆとて

そせい法師二二三

三九三

鏡山やまかきくもりしぐるぼ抄れど紅葉は猶もてりまさりけりあかく六帖ぞあきは見えけるばかりぞあかく一本

○二ノ句、曇りは、鏡の縁なり。末句の見えと云詞も、鏡のよせならんか。くもりといふに對へて、然れども紅葉はあかく見ゆといへるが、此歌の趣向なり。あかくは、赤あかくに明あきくを兼たり。

となりにすみ侍ける時、九月八日九異、伊勢が家の菊に、わたをきせにつかはしたりければ、又のあした、をりてかへすとて

※つかね緒云、藤原雅正がとなりに住待ける時、九月八日家の菊に、綿をきせにおこせたりけるを、又のあしたをりてかへすとて
○菊に綿をきするは、露霜にあてずして、久しからしめんとのさまなり。抄に、うつしの香をもてはやさんとにや、とあるは、いかどなるべし。かくて、此詞書の意は、歌の所に合せていふを見るべし。

三五四

数かぎろなくしらず君がよはひをのばへつる名たる宿の露しとならむ異

伊勢(二十三)

○瓶麻呂云、九月九日に菊を贈るはさる事なるを、昨日贈られたる綿を着せて返すには、作意ある事なり。そはまづ、露は菊の上におく物、綿も白くて花の上にといたどかせたるを、露によそへなしてよめるなり。此詞書に、またのあした、をりてかへすとて、とあるをりては菊なり。かへすは昨日贈たる綿をいふなり。折たる菊に、其綿を着せたるまゝにて、返し遣すなり。されば、其贈たる綿の、謝辞まごころごを云て返す歌なり。数しらずは、数限もしられぬほどいふ事、のばへつは、延へつなり。名たる宿とは、名菊を植たる我宿のと戯にいふ意なり。名たる宿と、自負したるが興なり。露とならんとは、綿に合して云なりといへり。然れば、一首の意は、此昨日贈られたる(二十三)綿よ、汝は、数限も知られぬほどに、君主の齢を延べくて、此我が菊に名高き宿の露となれかしといふなり。

返し

藤原雅正

三九五

露だにも名たる宿の菊れならば花のあるじやはいくよなるらむ伊勢集

※下の句を俗言にいはく、花ノ主ハ、大年増(オホドシメ)デアラウ、といふ意なり。

○瓶麻呂云、此返歌は、露だにも限なき齡といふ宿の菊ならば、其花の主は、幾世ばかりの齡なるらん。

さぞ旧き事なるべし、と云意なり。これ此集の頃の贈答の戲の例なり。いくよなるらんとある、なるらん

の詞に心をつくべしといへり。此説まことにおもしうし。此集の頃の眞の面目を得たりといふべし。菊は、万葉で

見えずして、今のよの始、桓武天皇の御歌に「此ころのしぐれの雨に菊の花散ぞしぬべきあたらし香をと、日本後紀に見えたるを、類聚国史に擧られ、又平城天皇の大同二年に、神皇飛にて、四位以上には、菊をかざしめ給ふ事見えて、其時の御歌には、ふちばかまどよませ給へる事、類聚国史、又後紀に見えたり、此四位（二十四オ）以上云々の事は、国史も後紀も、共に菊は團の字を誤伝へしなるべく、和名ゆか、菊の和名を、かはらよもよといへるは、葉の似たるよりいへるなるべしなどいふ事、打聽に見えたり、猶本書どもによりて考ふべし、さて上件のおもよきを以て見れば、まづは、菊は、桓武の御代などに、はじめて此大龜國にはわたり來つらむ。さて此方にてははじめより色香をめでつる事と見え、古歌ゆ自然聞ゆるを、

なが月のこゝぬか、鶴のなくなりければ

○なくなりければ、死ければといふ事なり。飛ヒ失たる事にはあらず。

伊勢

三六

菊のうへにおきあるべくはもあらなくに干とせの身をも露になす哉

○我がかねくめでこし鶴よ、菊の上におきある露ならばこそ、今日をかぎりとも消ゆべけれ。その菊のうへにおきあるにてもあらぬに二三四ウ、干とせの身を、露の如くはかなくなす事かなといふなり。詞書

に、長月九日とあげて、歌に「菊のうへにとあるを、大かたに見すぐすべきにあらずと、麁麻呂いへり。

また師翁は、菊の上の露は、千年の齡を延る物にして、さて消やすきものなり。鶴も、千年の物なるは同

じ類なれども、露とはかはりて、いつまでも長寿たるべきに、菊の露の如くに身をなして、消果たる事か

なといふにもあるべし、といはれたり。下哀にも、此同時の歌見えたり。

だいしらず

よみ人しらず

三七

きくの花長月ごとにさきくれば久しき心秋やしるらん

○月々の中にて、長月という月ごとに咲来たれる花なれば、久しくあるべきと云、菊の心をば、かねて秋が知るにてあらんといふ意なり(二十五)。さきくればは、咲来ればにて、昔より、九月ごとに咲来たればと云事なり。万葉卷六の、美濃国當耆ノ郡、多度ノ山ノ美泉今云兼老の歌に、「いにしへゆ人の言来流老人のわかゆちふ水ぞ名におふたぎのせ、とあるなどをも引合せてさとるべし。

三六

名にしおへば長月ごとに君がためかきねの菊はにほへとぞおもふ

○抄に、長月とて、長久の名にしおへば、此月のけふ、菊も君が為に、必句へとなりとある、此意なるべし。然れども、君が為は、君が代などいふ君の意とは聞えざれば、人におくりたる歌にて、其人をさすなるべし。

こと、ころより一本
ほかの菊をうつしうゑて

三九

ふるさとをわかれてさける菊の花たびながらこそにはふべらなれ(二十五)

○故郷をは別離ワカレて来て、此所にて咲たるなれば、此所は旅にてはあれども、旅のまゝにて、我が咲たる所なれば、故郷にも異らず、十分ににはふ事なるべしと云意なり。二ノ句に、わかれてとありて、末句にほふとあるに心をつくべし。菊の、旧来キウライ生ナマてありし所を故郷として、さて今他所イマノトコロに移したれば、今ある所を旅といへるなり。拾遺秋、「いづこにも草の枕をすとむしはこゝを旅とも思はざらん。新古今秋上、「女

郎花野べのふる里思ひ出てやどりしむしの声や恋しき、などの類なり。

男の、久しうま^くでこざりければ^{一本}

四〇〇

なに、菊いろそめかへしにほふらん花もてはやす君もこなくに

○色染かへしは、古今^秋「色かはる秋の菊をば一とせにふたゝびにはふ^{二十六}さ花かとぞ見る、「秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされば、などある如く、露霜に色のうつるひたるさかりをいふなり。公忠集に、霜中の菊をゝしむといふ事を、「おく霜に色染かへしにほひつゝ花のさかりはけながら見ん、などもあり。花もてはやすは、花を賞^{イデ}て、榮有^{ハネア}らしむるにて、令^{ハヤス}榮の意なり。幻巻、「わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の尋ね来つらん、などもおなじ。一首の意は、古今^春「山ぶきはあやなゝさきそ花見んとうゑけん君がこよひこなくに、^{但し此古今なるは、故郷人なるべけれど、意は通へり。}などの類にて、菊の花は、何しに其やうに、露霜に色をそへて、うつくしく、艶^{ユメ}ふ事ぞ。さやうににほひても、はれうつくしやと、見はやすべき^{我が}思^ふ人の、来もせぬのに、といふなり。かくて、此歌などは、もとより、男の許へやるべき心^二十六^三にてよみ出たるにはあれども、それを、男に對ひてはいはずして、花に對ひての、一人ごとのさまにいひなしたるものなり。此類古歌に多くある事なり。

^{古今番下に、「さくら花散らばらんちらずとてあるさど人の来ても見なく」といふ歌の、連續の脱離の終に、カヤウニヨ、徳ユエ御目ニカケ候上、}

^{といふ事を添へられたる、まことにおもしろき事たくひなし。今此歌など}

^{と、さる心ばへなり。かくざまなる歌は、いづれもなずらへて心得べし。}

月夜に、もみぢのちるを見て

四〇一

もみぢ葉の散くる見れば長月のありあけ月のかつらなるらし^{なりけり抄又一本}

べ異

○古今上秋「久かたの月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらんを、本歌にてよめるならんか。又た
と、今見るさまにて、思ひよせたるにてもあるべし。末句は、抄本一本などになりけり」とある方、二ノ句
の見ればとある語勢に、よくなひて、まさりさまに聞ゆ(二十七)

題しらす

四二 いくちはたおればか秋の山ごとに風にみだるゝにしきなるらん

○尽もせず、山毎に乱るゝは、幾千機おりたるにしきなれば、かやうに多く乱るゝならんとなり。

四三 なほざりに秋の山野山をわけゆけばにしきをきぬに 六帖べをこえくればおらぬ錦ををきぬ人ぞなき

○なほざりには、わざとにはあらずして、といはんが如し。逍遙がてら、秋の山べを越れば、人ごとに、

自然の錦を着ぬ人もなしとなり。初句なほざりにと、四ノ句不織とかけ合たり。菅家万葉、「ひぐらしに
秋の野山をわけくれば心にもあらぬ錦をぞきる。おらぬ錦は、人の手して不織なり。万葉十三に、「山の
べのいしのみ井は自然成錦オソノカラサレルコトをはれる山かも、とある自然成錦オソノカラサレルコトに同じ。(二十七)

四四 もみぢばをわけつゝゆけば錦きて家にかへると人や見るらむ

○史記須羽本記 又漢書に、富貴不還、還二故郷一。如三衣レ繡レ夜行とあるより、故郷へは錦を着て帰るといひ、又はえ
なき事をば、夜の錦ともいへり。貫之集に、「白波のふるさとなれやもみぢ葉のにしきをきつゝ立かへる
らん、など猶多し。

四三

打むれていざわぎもこが鏡山こえて紅葉の散らんかげ見んに異

貫之

○わぎも子がは、鏡といはん料にて、かげ見んは、鏡の縁語なり。鏡山こえては、越えながらといはんが如し。鏡山を越て、他の所思ふに此歌は、月の明らかなる夜などによまれたるなるべし。紅葉の歌にては末句、かげ見んとあるを以て見るに、夜とはなけれど、かならず夜二十八の事と聞ゆるなり。

四六

山風のふきのまにくもみぢ葉はもおのがちりくなりぬこのもか六帖のものにちりぬべらなり

よみ人不知

○ふきのまにくは、俗に、ふくにシタガツ随て、又吹次第に、などいはんが如し。このもかフキシゲダイのものは、此面彼面にて、此方コトカタ彼方カノカタなり。拾遺名物「秋風の四方の山よりおのがじふくに散ぬる紅葉かなしな」とあるにやゝ似たり。又思ふに、古今七条ノ后ウセたまひけるに、「おきつ波、あれのみまさる、宮の中は、云々、秋の紅葉と、人々は、おのがちりく、わかれなば、たのむかげなく、なりはてゝ云々とあるなどの類にて、何か人々の別るゝをりなどの歌にや、とも思はるれど、猶たゞ、秋の歌と見ん方然るべし。(二十八)

四七

秋の夜に雨と聞えてるものはふりつるは風シタガふにみだるゝ拾遺紅葉なりけり

○後拾遺冬、「木の葉ちる宿はきゝわくかたぞなきしぐれする夜も時雨せぬ夜も。

四八

立よりて見るべき人のあればこそ秋のはやしに錦しくらめ

○初句も、錦を裁縁語なり。されど、こは縁にいへるのみにて、歌の意は裁切意にかゝはるにはあらず。錦しくは、紅葉の散り敷くをいへるなり。

四〇九

木のもとにおらぬにしきのつもれるは雲の林の紅葉なりけり

○おらぬ錦は、人の手して不織をいふ事、上に、「おらぬにしきを着ぬ人ぞなき」とあるに同じ。くものはやしとは、雲林院をいへりと聞ゆれば、こは彼院にてよめるか、又は其近きあたりにての歌なるべし。

(二十九卷) 薨麻呂云、雲林は、人間ならぬ所の物なれば、不織錦といへるに、思ひよせたるたくみなるべし。

不織錦といふも、此所にては仙人などこそさもあれ、世ノ人の物にはあらぬ意にいへりと聞ゆ。かくて四ノ句、雲の林は、彼院の名をこめたる事、論なかるべしといへり。

此院は、今の京の北、紫野に在て、其始は、淳和天皇の離宮にて、天長九年こゝに行幸あり、雲林事上名づけられたり。其後、承和十年の幸には、雲林院と紀に見えたり。さて常康親王に屬ひしを親王出家したまひて後、こゝを通昭に譲給へりと、打聴に見えたり。拾芥抄に、常康親王造云々とあるは、中ほどの事なるべし。よく思ふに此歌、薨麻呂の説

の如くなるべし。さて上下の句の間に、まことになど云詞を入れて心得べくや。三ノ句のは文字、末句のなりけりの辞、甚力あればなり。

四一〇

秋風にちるもみぢばゝをみなべし宿におりしく錦なりけり

○女郎花を、女にいひなす事は常なれば、秋の野の、女郎花といふ女の(二十九卷)織て、我宿に敷く錦なるよ、といふなり。貫之集、「秋の野の萩のにしきは女郎花たちまじりつゝおれるなりけり。」

四一一

あし引の山のもみぢばちりにけり嵐のさきに見てましものを

※山の紅葉ハ、モウハヤチツクワイナ、嵐ノフカス
先ニ見ヤウデアツタモノヲ、といふ語勢なり。

○若紫巻、「宮人にゆきてかたらん山ざくら風よりさきに来ても見るべく。

四三

もみぢ葉のふりしく秋の山べこそたちてくやしき錦なりけれ

○此歌の意は、後拾遺上「から錦色見えまがふもみぢ葉のちる木の本はたちうかりけりなどの類にて、散やすくはかなき、紅葉の木の本を、我が立去りて悔しといふを、錦の縁に、たちと云たるにてもあるべし。裁断の意ならんには、をしとはいふべく、悔しとはいふべからぬさまなればなり。立去る事を、たつとのみいへるは、古今上「思三十まふどちまとゐせる夜はから錦たまくをしき物にぞありける、など猶多かればと思ひつるを、麩麻呂云、此歌にては、たちとあるを、立去る意と見んは誤なるべし。たちとのみあらばこそさも見ぬ、たちとあるをや。按に、たちとは、錦を裁事にて、錦にてありしを、とりて服に裁ば、元來の錦の躰は散り失するなり。さやうにあたら錦を散失させたるを、悔しとはいふなるべし。紅葉の散乱るゝを、錦の躰の散失する事によみなしたるなりといへり。此説然るべく覚ゆ。抄に、紅葉の散てをしきを、裁て悔しきと説なるべしとあるも、此意と聞ゆ。

四三

立田川色くれなるにけり山の紅葉もいまはちるらし六帖

○意明らかなり。(三十七)

四四 たつた川秋にしなければ山ちかみ流るゝ水も紅葉しにけり

○三ノ句は、初句の上につして意得べし。六帖、「山近き所ならずばゆく水のもみぢせりとぞおどろかれまし。」

よみ人しらず

四五 もみぢ葉の流るゝ秋は川ごとに錦あらふと人や見るらん

○契沖法師百人一首改竊抄云、華陽國志に、蜀、時濯錦於江中、則鮮明也。また、譙周益州志云、成都織錦成、

濯於江水、其文分明、勝於初成、他水濯之、不如此江水也。とあるなどより、錦を洗ふとはいふよしをいはれ、童蒙抄にも、益州の青衣水の事見えたり。げにこれらの事によりて、いひ出たるなるべし。三十一
一〇七

四六 立田川秋は水なくあせなゝんあかぬ紅葉の流るればをし

○あせなゝんは、浅くなれかしなり。万葉三、「久かたのあまのさくめがいは船のはてし高津はあせにけるかも、などもあり。今の俗にも云詞なり。」

文室朝康

四七 なみわけて見るよしもがなわたつみの底のみるめも紅葉ちるやと

○わたつみは、海の事なり。秋は、世の中の木葉、なべてもみづれば、海底の海松いんげん和布しも紅出きゆうしゅやと、波を

わけて見るよしもあれかしとなり。末句は、散るやとにても聞えはすれど、猶思ふに、するやとの誤には
 あらざらんか。一首の意、此世上の木の葉に比べて、海底の海松和布も紅出やと^{キヅ}いへるにて足りぬべ
 し。ざるを、紅葉して、散る事まで(三十一)にいはんは、いさゝか行こしたるこゝちすればなり。わたつ

みのた文字を濁るは誤なり。かならず清むべし。

冠辞者、わたの底の条云、集中万葉云云に、渡津海、方便海、納津海など書るが中に、納は借字のみ、方便は、方便もて人わたすてふ事をかりて書しなり、されば

漢と書たるそ正しき意にて、即わたるてふ言なりけり云々、そもく和多都美てふ語は、古事記を考るに、二神のみこを生給ふ条、生海神、名ハ大納津見ノ神云々、わたつみの神とは、海津持(ワタツモチ)の神てふ意なるを知べし。さて、和多津毛知てふ語を釈に、和多は、渡なり、津は、例の助辞なり、見は、毛知の反りなり、故に約めて美といふ。然るを、万葉の歌に、渡津海と書たるもあれど、此海は、美の反字に借しのみなり云々。又和多津見を、海の惣たる名とする事は、神の名より転れるなり。故るを、いと上つ世に、海をわたとはいへど、神名の外に、和多津見てふ語見えず。大津飛鳥などの御代の頃よりやいひけん云々。又、古史万葉延喜式などまで、仮字にては、和多都美と書て、和歌部字美と書る事なし。これにて此よみも何も明らかなり。か、わたつうみとよめとはいひ初けん。多をもいかでか濁りそめけんとなり、これにて此よみも何も明らかなり。

藤原おきかせ

四八

木葉ちるうらに波たつ秋なればもみち^{と家集}に花もさきまがひけり(三十二オ)

○花とは、波の花をいへり。色づきたる木葉の、風にちる浦に、波もたてば、紅葉に波の花も混ぶ事よとなるべし。風のそよ／＼と吹来るに合せて波のひら／＼と立わたるよと見るほどに、木の葉のはら／＼と散て、海上に浮ぶさま見るが如し。

よみ人しらす

四九

わたつみの神にたむくる山姫のぬさをぞ人は紅葉といひける

○わたつみの神は、海神なる事上にいへるが如し。海に散る紅葉を、山姫の海神に手向る幣^{ナヒ}なりとして、さて、人間のみちと名づけたる物は、此山姫のぬさの事なるよとなり。古今^{下秋}「立田姫たむくる神のあ

ればこそ秋の紅葉のぬざとちるらめ、と似たる歌にて、いひなしことなり。たむけ、又ぬざの事は、下
に委しくいふべし。(三十二)

貫之

四〇 日ぐらしの声もいとなく聞ゆるは秋の夕ぐれに六帖夕ぐれの一本になればなりけり

〇いとなくは、無暇レトマクにて、俗にせわしなくといふに近し。さらでも短き秋の日の、九月の末にて、夕暮に
さへなりたれば、蜩トの声もいとまなげに、せわしく聞ゆるよな、といふなり。九月の末になりたる事は、一首の
上には見えざるやうなれども、秋
夕ぐれにとあるは、必秋も末になりて、
又夕暮にさへ、と三意と聞ゆるなり。

よみ人しらず

四一 風のおとのかぎりと秋やせめつらん吹くるごとに声のわびしき

〇初句は、四ノ句へかけて心得べし。かぎりカギリと秋やは、秋やかぎりカギリと、いはんが如し。風の音の吹来るこ
とにわびしきは、九月も末になりて、秋のかぎりカギリとや迫りセマつらんと云意なり。かくさまに、句の次第をかへて見る事
は、実(三十三)にはよからぬ事なれ
ども、心得がたき歌にては、かりに次第をかへて見る時は、心得やすき物なり。さて
さとりたる上にては、もの如く、初句よりよみくだして、意をあらはすべきなり。かくて此歌、吹くることに、シツベ琴をこめたるな
り。さて其琴の方にとりては、上句、風の音のかぎりとは、調子シツベの高き至極カギリと、いふ意と聞ゆ。せめつら
んは、表の意にては、追(三十一)つらんにて、
て、秋の時節の終になりたる事。琴の緒を、いと強くはりて、音の高き至極カギリを強くといふ意なるべし。拾遺名物
に、「松のねは秋のしらべに聞ゆなり高くせめあげて風にひくらし、とあるなどもおもひ合すべし。又上
秋に、「松のねに風のしらべをまかせては立田姫こそ秋はひくらし、とあるをも見合すべし。

四三

もみぢ葉にたまれるかりの涙には月の影こそうつるべらなれ

○雁の涙とは、露の事をいへるなり。古今上秋「鳴わたる雁のなみだや落三十三」つらん物思ふ宿の萩の上の露。一首の意は、常に人間の袖の涙に、月のうつる事をいへば、雁の涙にはと思ひよせたるならんかとも思へど、猶それまでにはあらず。たゞ、紅葉におきたる露に、月のうつりたるを見て、かれは雁の涙にて、月影のうつれるなるよ、といふ意とのみ見ん方、歌さまおほらかにてまさるやうなれば、此後の説の方なるべく思はる。

あひしりて侍ける男の、久しうとはず侍ければ、九月ばかりにつかはしける

左一本
右近

四三

大かたの秋の空だにわびしきに物思ひそふる君にもあるかなそ有ける異

○一ト通りに、何思ひなくてだにも、秋の空は、物悲しくわびしきに、その三十四さうへに又、かくつれなくのみし給ひて、我に物思ひを添へ給ふ君にもある事かな、さてもく、といふなり。大かたのは、俗セト、ホウに通のと云にちかし。

だいしらず

よみ人不知もも

四四

わがごとく物思ひけらし白露のよをいたづらにおきあかしつゝ一本

○恋の歌にて、人のつれなきなどによりて、物思ひをして、秋の長夜を、幾夜も起明したるころ、露を見て、彼露も、我がごとく物思ひをしたるなるべし。此長き夜を、おき明しくして、といふなるべし。い

四五

秋ふかみよそにのみきく白露の誰がことの葉にかゝるなるらん

○私ワシを厭ウツシき給ひたる事の深さに、近ごろは、よその人となりはて給ひたるやうに聞及びつれば、今かく訪ひ給ふも、御心づから来給へるにはあらじ。誰がをしへたる言葉にかゝりて、かくおはしたるにか、と云て、かの親のいさめたる事を、しらぬにもあらぬさまに、ほのめかしたるなり。

るが如くそといふ事なり。

たれば、此歌をみたりといふなり。これらの詞書、其世のさまをしらでは、相しりて云々などいふは、みだりがはしきみそか事の 上世より此集などの頃までも、今世の如く、妻をば必ず男の家によびとりて、一つ家に居りといふにはあらず。大かたは、女は即その親の家に在りて、男(三十五才)は、其女の許へ通ひすみたる事にて、もとより其親々の、はからひゆるしての事なり。これ其世のさだまりたる常の事にて、さらにみだりがはしきわざにはあらず。愛くは、源氏物語などをよく見れば、心得らるゝ事なり。但し、男女相知りて云々などいふ詞書、恋の歌のへざりは、皆此定なりといふにはあらず。中には、いとあるまじきみそか事の歌などもまゝあれども、そはこと事なり。此所の詞書などは、上にいへるが如くそといふ事なり。

相知て侍ける人、後々まかりとはず一本までこずなりにければ、男のおや聞て、なほまかりとへと、申をしふと聞て後うに、まうで来たりければ

平伊望朝臣女

○後々までこずは、脂不レ来マツなり、初めは折々かよひきたりしが、後々には、かれくレになりて、来らざるなり。男のおや云々は、其かれがれになりたるさまを、彼男の親の聞つけて、それはよからぬ事ぞ、やはりかはらず往訪オトコへなど、云と教ふるよしを、此作者伊望朝臣の女の聞及びたる、其後に、彼男の来

たづらにと云は、露の方にはあづからず、一人起明す我方にのみかゝるなり。拾遺恋「露だにもなからまし

(三十四)

かれにける男の、秋とへりけるにつかはしける異(三十五ウ)

昔の承香殿のあこぎ

四三

とふ事の秋しもまれに聞ゆるはかりにや我を人のたのめし

○上ノ句は、訪ふ事のまれに秋しも聞ゆるはと云意なり。秋は雁カキの来る節トキなる、其秋しもかく稀レアに訪ひ給ふは、元来キタマリ我に頼に思はせ給ひたるも、一鉢の御心は、仮初カキマツのすさびにておはしたるにやとなり。仮を雁にそへたるは論なし。秋に厭をも、軽く余情にふくめたるなり。されど此秋に厭をふくめたるは一首の余情なり。歌の表へたてゝ見んはわろし。

紅葉と、いろこきさいでとを、女のもとに遣送して

○色こき、さいでは、抄に、紅の絹のきれなり、とあるが如し。絹布のきれを、さいでといふは、裂袴サキハカマの意なり。和袴ニギハカマをにぎでとも(三十六ウ)いへり。さいでのでも、にぎでのてに同じ。さいは裂サキの音便なり。袴は、布帛の惣名にて、白たへ、荒袴、和(ニゴ)精シメなど云、皆同じ。委くは、冠袴等に見えたる。猶下にも引出て云へし。今世に衣服の古着を、ふるでといふも、古袴の約りたるなり。然れば、やゝ大きなをもいふべけれど、まづは小さきを、俗に小切(コギ)と云意にのみいへるさまなり。枕草子マクらのの中にありけるを見つけたる。又、宇治拾遺物語通にし方恋しき物の条に、ふたあり、あび染などのさいでの、おしへされて、草子の中通にし方恋しき物の条ににありけるを見つけたる。又、宇治拾遺物語佐土國有金の条に、袖うつしに、くろばみたるさいでにつゝみたる物をとらせたり云々、など見えたり。

源とゝのふ

四三

君こふる涙と抄本にぬゝる我袖と秋のもみぢといづれかまさされりる異

○紅涙に染し我が袖と、秋の紅葉の色の深さは、いづれかまさされるぞ(三十六ウ)、くらべて見給へとなり。

上ノ句は、彼さいでをさしていへるなり。衣の切なればなり。さてかくいひやられたるさまを思ふに、さ

いでの方、紅葉よりは、色の深かりつらんと聞ゆるなり。此歌などのてにをほの事、玉緒二の巻に、右の歌、又此集十一、「恋し

き人思ひこめつゝあるものを人だらざる、涙なになり、六帖、「葉もな

くなきたる朝のてる日にも思はれまざる我や何なり、下若菜巻、「おきてゆく空もしらぬ明くれにいづくの露のかゝる袖なり、桐恒集、「くちへ見ん我故手

件に歌共、なにいづくれなどいへれば、必なるれるなど、結をへき定まりなるを、るといはで、りし結べるは、いとくちつらしき結びなり。されば、いづ

れの本にも、皆ると書る歌もまゝあり。又一本にはり、一本にはなるるもあり、これを思へば、るとあるが正しきかともいふべけれど、ると書る歌は猶すく

なくて、りなるが多く、又菅家万葉なるは、たしかに真字(マナ)にて、りの手をしも書たれば、るとあるは中々にひがこととして、りなることうたがひな

しらを加へて、後にると改めつるものにして、外の集は、人の手を入れ(三十七す)さるゆゑに、なかく)にて

もとのまゝにて伝はれるなり、といはれたり。猶同し類の変格もいと多くあるは、玉緒をひらき見て心得べし。

題しらず よみ人不知

四三

てる月の秋しもことにさやけきはちるもみぢ葉をよるも見よとか

○古今下秋「秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉の数を見よとか。

四二

など我身したば紅葉となりけん同じなげきの枝にこそあれ

故宮の内侍に、兼輔朝臣、しのびてかよはし侍ける文をととりて、書つけて、内侍に遣しける

○我友古道云、兼輔朝臣の、内侍の許へやり給ふ文を、此作者の、中途にて取て見て、其文の端などに、

此歌を書そへて、さて内侍の方にやりたる事と見えたり。もとより此よみ人も、内侍に心をかけて居たる

(三十七)事は、歌の上にてしられたり。さて兼輔朝臣の文の中、歌の詞などに、なげきによせたる詞あり

しなるべし。さる故に、同じなげきとはよめるなるべし。さらでは、兼輔朝臣をも同じなげきとはいふ

べくもあらず。一首の意は、兼輔朝臣も我身も、ともに君を思ひて、同じ歎の枝ながら、兼輔朝臣は、君

にもしられて通ふを、いかなれば我身は、下葉の紅葉の如く、かくれたるものになりて、深き心の色を、君にもしられざるならん、といふなるべしといへり。下葉紅葉といふ事、外にいまだ見及ばざれども、決して右の意と聞ゆ。したはは、下葉なり、はもし濁るべし、てにをはの(者)にてはあらず。

秋、やみなる夜なりける夜 抄本、かれこれ物がたりし侍るあひだに、かりの鳴わたり侍ければ(三十八)

源わたす朝臣抄

四〇〇 あかゝらば見るべきものをかりがねのいづこばかりに鳴てゆくらん

○薷麻呂云、此歌、此まゝに見ては、いかにも味はひ知られぬ歌なり。故考ふるに、こは俳諧躰の歌にて、かゝらばかねばかりを以て為立たるなり。かゝらば見るべき物をといふは、秤ハカリの用なり。菅家万葉上に、「かけつれば千々のこがねも数しりぬなぞわが恋の逢ふはかりなき。此歌六帖秤の題とあるなども、引合は、何所(ドコロ)にて、鳴て行らんにて。いづくのほどにといふ意なり。万葉十、「秋風に山飛こゆるかりがねの声遠さがる雲かくるらし。

菊の花をれるとて、人のいひ侍ければ(三十八)

○或人の家の菊花を、人のをれるを、主アツジのいかりて、いひとがむるを、此作者の聞てよめるよしなり。いひ侍とは、其事を答めいふなりと、つかね緒にも見えたり。答めいふ事を、いふとのみいへる事は、上三葉中三葉にもいへり。

四三

よみ人不知

いたづらに露におかるゝ花かとして心もしらぬ人やをりけむ

○主アズメの見はやしめせずに、すておかるゝ花かと思ひて、主の賞翫せらるゝ心をもしらぬ人の、折たる事にやといふなり。露におかるゝは、たゞ露に被レ結ナカたるのみのといふに、主のすておく意を、軽くふくめたるなり。上中秋「秋の野の露におかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる。(三十九才)

身のなりいでぬ事を思ひなど、なげきて。侍けるころ、紀友則がもとより、いかにぞととふらひおこせて待ければ、返事に、菊の花を折て遣しける

○身のなり出ぬは、官位など昇進せぬ事、なり。今世にても、なりあがるなりのほるなどいふに同じ。

藤原忠行

四三

枝なくも葉なくもうつろふ秋の花見病友別集ればはてはかげ病友別集なくなりぬべらなり

○父祖の蔭病友別集によりて、子孫の出身ひ抄本する事を、蔭病友別集と云。此歌は、其蔭位の事を、花の枯果て、蔭病友別集のなくなるにそへたるなるべしと、師翁いはれたり。一首の意は、此菊の枯行くを見れば、終つひには、蔭病友別集もなくなり果るならん、といふを表にて、我がかく官位も進まずあるは、終つひには衰へ果て、父祖の蔭も、かひなくなり果るならんといふなり。又思ふに(三十九才)、我がかく昇進をもせざるにて見れば、子孫に至ては、見るか病友別集げも無く、衰へ果るならんといふ意にて、蔭位の事をばふくめられたるにもあらんか。蔭とは、選叙令に、凡授レ位者皆限二年廿五以上一、唯レ以レ蔭出身者皆限二年廿一以上一云々。凡蔭ニ皇親ニ者親王子ニ從四位

下、云々。凡五位以上子、出身者一位、嫡子、從五位下、云々。三位以上、蔭及孫、降三子一等、云々などある、これ蔭位の令なり。

返し

ともりの

四三

しづくもてよはひのぶてふ花なれば千代の秋にぞかげはしげらん みつ 家集

○筆にてさへ齡を延ぶといふ菊の花なれば、かげなくなるなどいふ事は、いかでかあらん。千代の秋を経て、末長く暮るならんと云て、父祖の蔭のなくなるなどいふ事は、いかでかあるべき。追々に昇進有(四十さて、栄え給ふべしといふなり。菊の露筆もて齡を延ぶといふ事は、風俗通等に見えたる、南陽酈縣の甘谷の事、慈童などの、もろこしの故事より多くいへり。

延喜御時。二本秋、うためしありければ、奉ける

つらゆき

四四

秋の月光さやけみもみぢ葉のおつる影さへ見えわたるかな らん 一本

○古今上秋「白くもにはねうちかはしとぶかりの数さへ見ゆる秋の夜の月。

題しらず

よみ人しらず 抄又一本

四五

秋風 抄又異ごとにつらをはなれぬかりがねは春かへるともかはらざらん

○つらなれる友をはなれぬ心なり。かくの如くして春も帰れとなり(四十)と、抄にあるや然るべからん。

又思ふに人の伴ひて他へ行をりに、送る人のよみたるなどにはあらかじか。須磨巻に、源氏君に従ひ奉て、惟光など、共に居る事を長清が
 「とこよ出て旅の空とぶかりがねもつらにおくれぬほどぞなぐさむ、といへるなどのさまに、よく似たればなり。されどこは試にいふなり。襄麻呂云、抄の説の如くにて、さて下句のかへるともといふに、帰る友をかけて、つらをはなれぬと、友もかはらぬとを、かけ合せたるなるべしといへり。

をとこの、花かづらゆはんとて、菊ありと菊のありときく所に、こひに遣したりければ、花にくはへてつかはしける

○抄に、草花をかづらにかざりしなり。一説、童舞のかざしの花云々。さなくともにや、とあれども、たしかにも心得がたき説(四十一)なり。正明云、万葉十九に、「から人の舟をうかべてあそぶてふけふぞ我せこ花かづらせよ、とある花かづらに同じかるべければ、挿頭カサシの事と聞えたり。ゆふとは、いと多くあつめたるものか、いぶかしといへり。猶よく考へて、追考に記すべし。

四三 　　みな人にをられにけりとさくの花君がためにぞ露もはおきける

○此歌の意、いさゝかたしかならぬこゝちす。抄には、恋の意と見て、彼男、此女を、心あだなりといひし事あるなるべし。其心を上句に陳してよめり。皆人にをらるゝ菊とあれども、さはなき故に、君がためにと露は置しとなり、とあれども、歌の表のみにて見れば、恋の意にてはなく、たと聞えたるまゝに、外々の家の花は、皆人に折られたりと聞及ぶが、此方のは、君がためにとて残し置たり、といふ意のみの(四十二)如く思はる。もし此意ならんには、詞書、「花かづらゆはんとて、菊のありときく所に、人のこひにおこせたりければ、花にくはへてつかはしける」などあるべく思はるゝなり。其意は、いづ方のも皆を

り尽して侍れど、君が家にのみ、花の有と聞侍れば、などいひおこせたるなるべし。詞書に、男のと云事あるによりて、変歌にやとは誰もおもへども、歌の意は恋のやうにも聞えず。又詞書に、菊のありときく所にとあるも、しらぬ人にはあらねど、深くむつびしたしめるあたりとも聞えざればなり。麴麻呂云、末句、露はおきけるは、すこしはおきけるといふ意なるべし。我宿の物にはあれども、秋の末になりては、日々に見るともなくてありしなるべし。たゞ皆人が折たりと、家人などといふを聞たるが、今乞ひ給ふによりて見れば、猶君が為にと四十二とて、少しは残りてあるによりて、まゐらするぞ、といふ意なるべしといへり。此説然るべくおぼゆ。

題しらず

ふく風にまかする舟や秋の夜の月のうへよりけふ今一本はこぐらむ

四七

○抄には、月の上よりけふはこぐとは水面に月のうつれる上を、舟の行なり云々。又或説に、落葉なり。月の上よりは、月の影よりとなり、とあれどもいかゞあらん。今思ふには、月の明らかなる夜、海上のさまを思ひやりてよめりし如くも聞ゆるなり。二ノ句に、やといひて、末句に、らんとあるを以て見るに、上中に、「秋の池の月の上こぐ舟なれば桂の枝に棹やさはらんとあるなどの、みづから舟を浮べたる意と聞ゆるとは、異なるやうなればなり。但初句のさまは、舟にもいふべし落葉の事の如くも聞ゆれども、猶いかゞあらん。例の題もよみ人もしられざれば、考ふべきよしもなし。師云、舟といふ物は、風にまかするものなり。風は天空ソツを吹くものなり。月も天空ソツにあるものなり。もとより天空ソツをふく風をたよりの船の事なれば、今かくの如く、月の上をこぎわたるにやあらん、と云意にもあるべし。もとより水上海上にての事な

れば、月の上と云は、水にうつれる月をいふなり。土佐日記に、十七日正月くもれる雲なくなりて、暁月夜いともおもしろければ、舟を出してこぎゆく。此間に、雲の上も海の底も、同じ如くになん有ける。うべもむかしのをのこは、棹はうがつ波のうへの月を、船はおそふうみのうちのそらをといひけん。きよされにきけるなり。又ある人のよめる、「浪のそこ月のうへよりこぐ舟のさをにさ(四十三ま)はるはかつらなるべし。これを聞て、ある人又よめる、「かげ見れば波の底なるひさかたの空こぎわたる我ぞわびしき、とあるを引合せて見るべしといわれたり。

四三

もみぢ葉の抄本はちるこのもとにとまりけり過ゆく秋は一本やいづちなるらむ

○重之集、「もみぢ葉をよするあじろはおほかれど秋をとらめて見る時ぞなき。

四三

わすれにける男の、紅葉を折ておくりて一本。侍ければなりけり抄本

思ひ出てとふにはあらじ秋はつる色のかぎりを見するなりけり抄本なるらん
○九月のつごもりがたの事とは、前後の歌の順序にてしられたり。されば紅葉を秋果る色の限といへるなり。君の我を厭果イハク給へる心を(四十三)見せ給ふにてあらんといふなり。

なが月のつごもりの日に、紅葉にひをよつけて、おこせて侍ければたり抄本

※つかね補云、長月のつごもりの日、紅葉に水魚をつけて、人の許よりおこせて侍ければ。

○花鳥餘情に、水原抄云庖丁譜云、氷魚ヒコには紅葉をしくユタと見えたり。総角巻にも、あじろのひをも心よせ奉て、いろ／＼の木の葉にかきまぜてもてあそぶなどあり。かゝれば、氷魚に紅葉を添ふるは、故実ある事と見えたり、正明云、木草に鳥をつくるは常の事なり。魚をつくるはめづらしき事なり。後三年の軍の絵詞に図あり。さて氷魚は、山川に居るはやといふ魚の今少し肉あるものにて、馬強などにて、もろこ色はしら魚の如く白しといへり。尾先の方、いさゝか紅なるものよしなり。所によりては、めづらしげもなく多かるも麩麻呂云、此四十四詞書の紅葉は、枝にはあらで、葉の事なるべのなれど、おのれはいまだ見ざるなり。氷魚をつけてとは、木の枝などに鳥をつけたる如くしたるにはあらで、紅葉に副くたるなるべし。もとより小さき魚を、鳥などの如く、枝に結びつくべきにもあらねばなりといへり。

ちかぬがむすめ

四〇 宇治山の紅葉ヤ一本を見ずはなが月の過ゆくひをもしらずあるべきぞ異あらし

○宇治川の氷魚を、うち山の紅葉につけたるなるべし。歌の意は、紅葉を見ずは、秋の暮果るをもしらすあらんを、これを給ひたればこそ、時節のうつりゆくをも知れと云て、日に氷魚をかけたなり。後拾遺冬、宇治にまかりて、網代のこぼたれたるを見てよめる、「うち川のはやくあじろはなかりけり何によりてかひをはくらさん。(四十四ウ)

四一 九月つごもりに つらゆき
長月トのあり明トの月トはあり見えながらはかなく秋はくれぬすぎぬべらなり一本

○小の晦日などに、廿八日の月の、朝のほどにはあるなり。有明の月は有ながら、はかなくと、有無の字

を対してよめるなるべしと、抄にはあれども、有無を対に趣意を立られたる歌とも思はれず。たゞ聞えたるまゝの歌なるべしと、師翁いはれたり。一首の意は、月を秋の物として、月末の廿八九日のころに、有明の月の残てあるを見て、彼月は猶あの如くありながら、秋ははかなく過行べきなり、といふ意なるべし。つごもりは、晦日にはかぎらざる事、上下春にもいへるが如し。又晦日にても、夜明がたに、月のかすかに見ゆる事はあるなり。

おなし夜抄本
のよ一本
おなしつごもりに

みつね（四十五才）

四三

いづかたに夜はなりぬらんおぼつかなあけぬかぎりは秋ぞと思はんか一本、
秋と抄本

○今日までを九月といひ、明朝よりを十月といへば、此今夜の間は、秋へつくにか、冬へ属ツくにかと、まづ疑ひて、いや／＼よく思へば、明朝より十月なれば、今夜の明ぬ間をは、猶秋ぞと思はんとなり。此秋ぞと思はんといへるに、秋を／＼しむ意こもれり。此歌の上句の意は、古今上に、一年のうち上に春は来にけり一とせをこそとやいはんことしとやいはん、とあるによく似たり。二ノ句の、なりぬらんと云前は、俗に、夜ハドチヲノ方ヘツク物ゾ、と云意にて、敵ニナル味方ニナルなどの、

ナルと云前
に同じ。

後撰和歌集卷第七新抄（四十五）

〈付記〉 本巻の翻刻は聖心女子大学大学院生西川祐美子さんの協力を得た。